

一度考えてみよう。

これまで繰り返し述べてきたように、「ぬぐう」は「よごれ」を除去することであるが、比喩的用法とは、恥や汚名といった抽象物が「よごれ」に相当する場合である。辞書でこの「ぬぐう」が「消す」「きよめる」「消し去る」などと説明されていることからわかるように、この場合の「ぬぐう」はこれらの抽象物を取り去る行為である。その意味で、「ぬぐう」の意味が生かされた用法である。

一方、「ふく」は必ずしも「よごれ」の除去をとまわらない。したがって、恥や汚名を取り去る行為を表現するには、不適當である。

「ぬぐう」にあって「ふく」にはないこの用法は、以上のように説明できよう。

4. まとめ

以上の分析を次にまとめる。

「ふく」

ある場所に布・紙状のものを密着させて動かす動作。

「ぬぐう」

すくいあげることによって、よごれを除去する動作。

言語経歴：1962年6月 東京都文京区生 0～
6歳 千葉県松戸市 6歳～ 横浜市緑区
(東京都立大学学部学生)

ぼける・ぼやける・ぼんやりする

大島 資生

1. はじめに

国立国語研究所1964では「ぼける」は「2.300感覚、疲労、睡眠」に、「ぼやける」は「2.501光」に分類されている。また、「ぼんやりする」については、この形での記載はないが、「ぼんやり」が、「3.300意識、感覚」と「3.501光」にそれぞれ分類されている。

一方、いくつかの辞書にあたってみると、「ぼける」については「色が薄れてははっきりしなくなる」「物の輪郭がぼやける」(『広辞苑第三版』)、「色・輪郭がぼんやりする」(『三省堂国語辞典第三版』)、「はっきりとした映像・色感が得られない状態になる」(『新明解国語辞典第三版』)など。「ぼやける」は「輪郭がはっきりしなくなる」(『三省堂国語辞典第三版』)など、「ぼんやりする」は「ぼんやり」の項で、「物の形、焦点がはっきりしない様子」(『新明解国語辞典第三版』)、「りんかく、形、色などがはっきりほかとは区別できないようす」(『三省堂国語辞典第三版』)などというふうに記述されている。

以上の記述から、これら三語はいずれも広義の視覚動詞であると考えて差し支えないだろう。また、辞書の記述の中で目立つことは、しばしば「はっきりしなくなる」という表現が用いられていることである。以下では「はっきりしなくなる」という現象を「不明瞭化」と呼ぶことにする。

ところで、視覚動詞について、さらには「見る」という行為について考えた場合、そこには必ず、「見るもの」と「見られるもの」が存在する。これをそれぞれ、「見る主体」「見る対象」と呼ぶことにする。

2. 分析

まず、次の例文を見てみよう。

- (1) 映写機の焦点が合わず スクリーンの映像がぼける。
- (2) 映写機の焦点が合わず スクリーンの映像がぼやける。
- (3) 映写機の焦点が合わず スクリーンの映像がぼんやりする。

(1)～(3)の文では「ぼける」「ぼやける」「ぼんやりする」はほぼ同義であり、ニュアンスの差も認めにくい。したがって、単なる入れかえ作業によって三語の意味的な差を探るのは困難であると予想される。そこで、若干視点をかえて、まず比喩的、あるいは慣用的な用法について考えてみることにしよう。というのも、比喩的・慣用的な用法は、何らかの形でそれぞれの語の本来の意味特徴を反映する場合もあるからである。

2.1. 比喩的・慣用的用法

(4) 年をとって 頭が ぼける。

(5) 年をとって 頭が ぼやける。

(6)¹²年をとって 頭が ぼんやりする。

(4)はしばしば用いられる慣用的表現である。(5)(6)は若干不自然であり、(4)と同義でない。さらに、これらを次のようにかえるとどうだろうか。

(7) 寝不足で 頭が ぼける。

(8) 寝不足で 頭が ぼやける。

(9) 寝不足で 頭が ぼんやりする。

「年をとって」を「寝不足で」におきかえると、「ぼける」が使いにくくなる。これは、「頭がぼける」と言えば、その原因は「年をとる」ことであるとされるのが普通だからである。ここで、(8)(9)が適格文となっていることに注意しておいてほしい。次に、

(10) カメラのピントが ぼける。

(11) カメラのピントが ぼやける。

(12) *カメラのピントが ぼんやりする。

ここでは、「ぼんやりする」を用いた文が不適格になっている。もう一つの比喩的表現として、次の例をみよう。

(13) *徹夜明けの太郎が ベンチに座って ぼけて
いる。

(14) *徹夜明けの太郎が ベンチに座って ぼやけ
ている。

(15) 徹夜明けの太郎が ベンチに座って ぼんや
りしている。

(15)の「ぼんやりする」は「時間をむだにする」(文化庁1975)意味で用いられている。ここでは(7)(8)(9)の場合と許容度が逆転している。また、

(16) *少年は ぼけていて 名前を呼ばれたのに気
づかなかった。

(17) *少年は ぼやけていて 名前を呼ばれたのに
気づかなかった。

(18) 少年は ぼんやりして 名前を呼ばれた
のに気づかなかった。

(18)の「ぼんやりする」は「ほかのことに気をとられて注意しない」(文化庁1975)意味である。ここでは、許容度の差から、「ぼける」と「ぼやける」が「ぼんやりする」と対立していると考えられる。以上の結果を次にまとめる。

	(4)~(6)	(7)~(9)	(10)~(12)	(13)~(15)	(16)~(18)
ぼける	○	?	○	×	×
ぼやける	(?)	○	○	×	×
ぼんやりする	(?)	○	×	○	○

この表からわかるのは、「ぼやける」が、「ぼける」

と「ぼんやりする」のどちらとも行動をともしうる——つまり、類義関係が近い——ということ、また逆に「ぼける」と「ぼんやりする」は類義関係が遠いということである。このような場合、類義関係の近い語同士を比べても、はっきりした差がみられないということもあるので、むしろ、類義関係の遠い語同士を比較することによって、何らかの意味特徴を抽出できるのではないかと期待される(cf. 杉本1984)。そこで、まず、「ぼける」と「ぼんやりする」を比較することによってそれぞれの意味特徴を取り出し、それを参考にして「ぼやける」の意味特徴を考えるという手順で考察をすすめることにする。

2.2. 「ぼける」と「ぼんやりする」

次の各組を比較されたい。

(19) ひどい近眼のために すぐ隣の人の顔も ぼける。

(20) *濛々たる煙で すぐ隣の人の顔も ぼける。

(21) 麻酔のせいで あたりの様子が ぼける。

(22) *霧のため あたりの様子が ぼける。

(19)(20)と(21)(22)で、それぞれの許容度の差は、不明瞭化の原因の違いのためであると考えられる。(20)(22)で「煙」「霧」と見る主体の外側にあるものが原因となっているのに対し、(19)(21)では見る主体の内側に属すると考えられる「近眼」(視覚の障害)、「麻酔」(視覚を含めた感覚に障害をひき起こすもの)なのである。このことから、「ぼける」の場合、不明瞭化の原因が主体の内側になければならないという制約が働くと考えられる。

ところで、現在ではほとんど使われないが、「ぼける」には次のような用法もある。

(23) 日に当たって カーテンの色が ぼける。

これは「色が薄れてはっきりしなくなる。色がさめる」(『広辞苑第三版』)といった意味あいでの用法である。このように、「ぼける」は本来、見る対象自体の変化を表すものだったようである。だが、(19)(21)の場合、「人の顔」や「あたりの様子」そのものが変化するわけではない。「ぼける」は見る主体が見る対象を視覚的にとらえたもの——以下見る対象の「映像」と呼ぶ——が見る主体の内側にある原因によって変化^(注)することを表す。そして、見る対象の映像が変化した結果、見る対象自体が変化したように見えるのである。この点でさきにあげた、「ぼける」の本来の意味が残存しているようにも思われる。(20)(22)のように見る主体と見る対象の間に「煙」や「霧」を介しただけでは、見る対象の映像が不明瞭になるだけで、映像が変化するとは言え

ない。そのために不自然になると考えられる。

一方、「ぼんやりする」はどうだろうか。

(24) ひどい近眼のために すぐ隣の人の顔も ぼんやりする。

(25) 濛々たる煙で すぐ隣の人の顔も ぼんやりする。

(26) 麻酔のせいで あたりの様子が ぼんやりする。

(27) 霧のため あたりの様子が ぼんやりする。

「ぼんやりする」には「ぼける」のような制約はない。さらに次の例もみられたい。

(28) 風景画が ぼけている。

(29) 風景画が ぼんやりしている。

(28)は一見不自然な文のように思われるが、「風景画」を写真・ビデオ等によって映像化したものが変化するのであれば、適格であるように感じられる。一方、(29)の方は、(28)と同様の読みも可能だが、「風景画」に描かれている事物そのものが不明瞭であるという読みの方が強い。すなわち、(29)の、見る対象は、「風景画」ではなく、そこに描かれた事物なのであり、それが——たとえば、きわめて柔かい色彩やタッチを用いている等の理由によって——視覚的にはっきりとらえられなくなるということを表している。以上のことから、二語の特徴を次のようにまとめる。

ぼける： <見る主体の内的原因により、見る対象の映像が明瞭にとらえられなくなる。>

ぼんやりする：<見る主体が、内外の原因により見る対象を明瞭にとらえられない状態になる>

なお、「ぼける」には次のような比喩的な用法もある。

(30) 議論の焦点が ぼける。

(31) エロティシズムとポルノグラフィの境界線がボケたり、はっきりしたりしながら、ぼくの網膜に映ってみえる。(鍵谷幸信「美の求道者」池田満寿夫『窓からローマが見える』解説 角川文庫 p.179)

これらは「ぼんやりする」でもおきかえられる。

(32) 議論の焦点が ぼんやりする。

(33) エロティシズムとポルノグラフィの境界線が ぼんやりしたり、はっきりしたりしながら……

上の例で、ガ格をとっているのは直接目で見るのでできないものだが、それらが比喩的に、映像としてとらえられ、不明瞭化することを述べているのだと考

えられる。特に(31)(33)は感覚的な例である。

2.3. 「ぼやける」

「ぼやける」は2.2.のはじめにあげたすべての例文において用いることができる。

(34) 濛々たる煙で すぐ隣の人の顔も ぼやける。

(35) ひどい近眼のために すぐ隣の人の顔も ぼやける。

(36) 麻酔のせいで あたりの様子が ぼやける。

(37) 霧のため あたりの様子が ぼやける。

つまり、「ぼんやりする」同様、不明瞭化の原因がどこにあるかという点での制約がない。では、「ぼやける」と「ぼんやりする」を区別するものは何だろうか。

2.2.と同じ例を使って比べよう。

(38) 風景画が ぼやけている。

(38)は、2.2.でみた二通りの解釈——①「風景画」の映像の不明瞭化、②「風景画」に描かれた事物の不明瞭化——が同じ程度に可能で、あいまいである。したがって、「ぼやける」は「ぼける」と「ぼんやりする」の中間的性格をもつと考えられる。だが、以上のことから、「ぼやける」の特徴を次のようにまとめる。

ぼやける：<見る対象の映像が不明瞭化する>

3. まとめ

2.2., 2.3.にあげた各例からわかるように、「ぼける」「ぼやける」「ぼんやりする」の三語の中では、「ぼんやりする」がもっとも使用できる範囲が広く、「ぼやける」「ぼける」の順にせばまっていく。それとは逆に不明瞭化する度合はこの順に強まっていくようだ。最初にあげた例文をもう一度みてみよう。

(39) 映写機の焦点が会わず スクリーンの映像が ぼける。(=1)

(40) 映写機の焦点が会わず スクリーンの映像が ぼやける。(=2)

(41) 映写機の焦点が会わず スクリーンの映像が ぼんやりする。(=3)

この三文の意味の差は微妙だが、直感的に(39)(40)(41)の順で不明瞭化の度合が弱まっているように感じられる。これは、「ぼんやりする」がただ漠然と「見る対象を明瞭にとらえられない状態になる」ことを表すだけなのに対し、外の二語は見る対象が映像化したものが変化すること、特に「ぼける」は見る主体の内部に原因がある不明瞭化を表すので、よりその度合が高くなると考えられる。また、上で見たように「ぼやける」がこの三語の中で中間的な位置を占めることは、2.1.の比

喩的用法に関して「ぼやける」が見せる特質、つまり「ぼける」とも「ぼんやりする」とも行動をともにしうることにつながるように思われる。

最後に上で抽出した三語の意味特徴を再掲しておく。

- ぼける： <見る主体の内的原因により、見る対象の映像が明瞭にとらえられなくなる。>
- ぼやける： <見る対象の映像が不明瞭化する>
- ぼんやりする： <見る主体が、内外の原因により見る対象を明瞭にとらえられない状態になる>

<注> 「ぼける」の場合の見る対象の映像の変化の仕方であるが、「近眼」が原因の場合などのように、物の輪郭が不明瞭になるだけのこともあり、また、「麻酔」などの薬物の場合のように、物の輪郭がくずれ、形が変わってしまうこともある。このように、変化の仕方はさまざまである。

言語経歴：1963年1月東京都豊島区生
(東京都立大学大学院学生)

「目標」の意味論

—めがけて・めざして—

井上 優

1. はじめに

われわれの行動において、「目標」(TARGET)は様々な場面で様々な意味あいを持って存在する。それに対応して目標を表すための言語形式もさまざまである。本稿では、目標を表す典型的な形式である「～(を)めがけて」「～(を)めざして」(以下「めがけて」「めざして」と略す)をとりあげ、その意味を論ずる。

本論に入る前に、なぜ「めがける」「めざす」という基本形式(終止形)でなく、「めがけて」「めざして」という接続形式(中止形)を考察するのか、その理由を簡単に述べておきたい。

第一に、「めざす」は、「青年は荒野をめざす」「常に完璧をめざす」のように、終止形が現実の発話の中で用いられることがあるが、「めがける」は「めがけて」以外の形は用いられないといってもよい。終止形での比較は、事実上不可能なのである。

第二に、「めがけて」「めざして」は、自立語としての性質が弱まった一種の後置詞的要素とみられる。「～めがけて(めざして)、そして～する」という等位接続、「めがけて」「めざして」の尊敬語化が不自然であることは、このひとつの反映である。

- (1) *めがけて そして矢を放つ。
- (2) *オリンピックめざして そして練習に励む。
- (3) *お嬢様が 的めがけられて 矢を放たれる。
- (4) *お嬢様が オリンピックめざされて 練習に励まれる。

等位接続、尊敬語化のためには、述語は自立語的でなければならないのである。

第三に、「めがける」「めざす」は、基本的には「動作を行なう前に、何かを目標にすえる」という意味であり、具体的な動作を伴わない。しかし、すえられた目標とそれに対する「動作」との間には、一種の共起制限がある。例えば、「的めがけて矢を射る」「オリンピックめざしてトレーニングに励む」とは言うが、*「的めざして矢を射る」「*オリンピックめがけてトレーニングに励む」とは言えない。同様の状況は英語においても見られる。shoot at a bird(鳥めがけてうつ)、start for the country(田舎めざして出発する)とは言うが、*shoot for a bird,*start at the countryとは言えない。このような「目標と動作の意味上の共起制限」が形式に反映されることは、多くの言語で見られると考えられるが、日本語の「めがけて」「めざして」も、そのひとつのあらわれといえる。

「めがける」「めざす」の文法における意味あいは、「めがけて」「めざして」という接続形式を考察対象にすることによってより明らかになるのである。

2. 「目標」の意味と「めがけて」「めざして」

2.1. 「着点」「目標」「方向」

まず、ここでいう「目標」について概略を述べる。

物体の移動(状態変化)には、「移動(変化)するもの」「移動(変化)の起点」「移動(変化)の終点」と